

曲亭馬琴『女郎花五色石台』翻刻（四）
-第二編その1-

メタデータ	言語: ja 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000158

曲亭馬琴『女郎花五色石台』翻刻（四）——第二編その1——

神田 正行

凡例（摘録。詳細は本誌五六五号（令和4年）掲載の、本稿（一）参照）

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除いて省略した。

- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。

- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書ことばがは同じ頁の下段に翻字した。

- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本（>133729。各編合綴）である。虫損や着彩、シミなどが目立たぬよう、画像には最低限の修正を施した。翻刻に際しては、東京大学附属図書館蔵本（E241133）や拙架蔵本、ならびに滝本慶三氏による翻刻（<https://blog.goone.jp/keiseisukoden>）なども参照した。

《上帙袋》

※東大図書館蔵本による



馬琴作 印 (乾坤一艸亭図)

豊国画 (年之丸の書印) 英泉画

女郎花

五色石台

式篇上 甘泉堂梓 印 (甘泉堂)

▼東大本の合綴仮表紙に貼付。

《第一冊前表紙》

※東大図書館蔵本による



曲亭馬琴作 上帙上

▼図は第二冊の前表紙と一連。二丁裏の口絵にもとづくが、同図の老女五十崎を、待乳姫に改めたものと思われる。

《序乙・一丁表 自序》

五色石台第二集

序乙

女郎花五色石台第二集小序
 唐の故事を思ふは、虞舜は貴きこと帝王たり、し
 猶親を慕ふといへり。是をもて大
 孝とす。人生れて四五歳までは、乳を吸ひ母を慕ふ而已、
 其成長るに及びて、嗜欲好憎なき
 ことを得ず。元が中に、性の最美きは、嘗て教を俟ずし
 て、行ひ良善なる故に、孝義を門閭に表せられて、名を
 揚げ親を顕す者、間是あり。不肖者は是を見て、例の事
 として羨みもせず、一たび悪に染るに及びて、放蕩無頼、
 せざることなし。世に人の親たる者、各其子を慈みて、
 愛て字養ざるはなし。(序乙) / 只克其子に教るは稀也。
 是故に「顔氏家訓」にいへらく、妻に教るは初見に在り。
 子に教るは童年に在り、其子の稚かりし時より、理義賞
 罰を正しくして、教訓厳密ならざれば、後に至りて亦是を、
 如何ともすることなし。其子の悪きを知らざる故に、愛
 に溺れて懲すことなく、父子相相する時に至りて、怨
 罵るとも、甲斐やはある。抑親の愆ならずや。己茲

只克其子に教るは稀也。是故に「顔氏家訓」にいへらく、妻に教るは初見に在り。子に教るは童年に在り、其子の稚かりし時より、理義賞罰を正しくして、教訓厳密ならざれば、後に至りて亦是を、如何ともすることなし。其子の悪きを知らざる故に、愛に溺れて懲すことなく、父子相相する時に至りて、怨罵るとも、甲斐やはある。抑親の愆ならずや。己茲
 弘化四年夏卯月上旬稿本成
 五年戊申正月吉日發行
 曲亭馬琴識

(七)
 女郎花五色石台第二集小序
 をみなへしこしきせきたいだいにしふしよじよ
 遊に唐山の故事を思ふに、虞舜は貴きこと帝王たり、し
 かるも年五十にして、猶親を慕ふといへり。是をもて大
 孝とす。人生れて四五歳までは、乳を吸ひ母を慕ふのみ、
 其成長るに及びて、嗜欲好憎なき
 ことを得ず。元が中に、性の最美きは、嘗て教を俟ずし
 て、行ひ良善なる故に、孝義を門閭に表せられて、名を
 揚げ親を顕す者、間是あり。不肖者は是を見て、例の事
 として羨みもせず、一たび悪に染るに及びて、放蕩無頼、
 せざることなし。世に人の親たる者、各其子を慈みて、
 愛て字養ざるはなし。(序乙) / 只克其子に教るは稀也。
 是故に「顔氏家訓」にいへらく、妻に教るは初見に在り。
 子に教るは童年に在り、其子の稚かりし時より、理義賞
 罰を正しくして、教訓厳密ならざれば、後に至りて亦是を、
 如何ともすることなし。其子の悪きを知らざる故に、愛
 に溺れて懲すことなく、父子相相する時に至りて、怨
 罵るとも、甲斐やはある。抑親の愆ならずや。己茲

に心あり、漫に兒戯の冊子を綴りて、もて彼惑ひを醒さ
まく欲す。本編も亦尔也。前集行れて、書肆復二集を
求る者急也。因て婦幼に代筆させて、稍その責を塞ぐと
いふ。

弘化 四年夏卯月上旬稿本成

五年戊申正月吉日発行

曲亭馬琴識 印(乾坤一艸亭図)

▼一丁表欄上に、改名主の印「浜」「衣笠」。

《略注》

◆虞舜は貴きこと→「舜、田に往き、旻天に号泣すと。

(中略) 大孝は終身父母を慕ふ、五十にして慕ふ者は、
予大舜においてこれを見ると」(『孟子』万章章句上)。

◆門閭に表せられ→「門閭」は村里の門で、孝子節婦な
どの善行を表彰する際に掲示を行う場所。

◆妻に教るは初見に在り→『顔氏家訓』には見当たらな
い。読本『開卷驚奇侠客伝』第三集に「抑 一年の
計は、元日にあり。妻に諭るは、初見に在り」(巻

三、二丁表)、合巻『新編金瓶梅』第二集に「されば
聖賢の教えにも、妻に教ゆるには初見にあり」(三十四
丁裏)とある。

◆子に教るは童年に在り→この句、『顔氏家訓』には見
当たらず、馬琴の他の用例も見出しえない。

◆弘化五年戊申→西暦一八四八年。二月に嘉永改元。こ
の年十一月六日、馬琴没。

《二丁裏・二丁表》



▼三輪山伝説や浄瑠璃『妹背山婦女庭訓』を踏まえる。

▼跡跟る芋環もがな帰る雁
 待乳姫
 浄瑠璃
 変化般七

本編作者自題

▼師竹庵は、馬琴の俳諧の師である吾山（会田氏）。一七
 一七く八八。

▼紙雛の立待月や三日の暮
 老女五百崎
 千葉介自胤
 録先輩師竹庵之句

《三丁裏・三丁表》



菅笠の亀有柳や田植時 遊仙庵主人題

▼「遊仙庵」は、馬琴の孫太郎の号。

手嵐先適斎宗正 ▼「无」は「无」の誤。
浮木亀六

朝顔や朝寝の床の忘れ草 録故兄東岡舎之句

▼「東岡舎」は、馬琴の兄興旨。俳号羅文。

炊婢桶鴛
先適斎妻老蚊

《三丁裏・四丁表》



風^{かぜ}やあらきくねる野^の中^{なか}の女郎花
 本編作者自題
 田舎小嬢置津
 死人鑑市
 わるものびたいち

折れ針^をの松^はのふる葉^はやとしの暮^{くれ}
 録故妹女貞之句
 ▼「女貞」は、馬琴の妹お秀の俳名。右の句は、家記
 『吾仙の記』巻四「百六九 解が女弟お秀下世」にも
 筆録される。

真崎弥四郎兵衛三登
 売針婦阿未曾

前編すでに糸口をとく、亦かの手嵐无方太は、僕力平が告ぐるにより、重石の顔はせ麗しきに似気もなき、力飽くまで猛しといふを、なほ疑ひの解けざれば、その詳しきを知らまくほしさに、折々人に尋ぬるに、「彼妻恋坂のほとりなる、雛屋妙作といふ、人形作りの娘にて、その名を重石と呼びなしたり。年は十五か十六ならん」と、まさしく告ぐる者ありしかば、无方太は聞惚れして、いよく捨てがたき思ひあり。「われ目の当たりに見て後に、せん術あらん」と思案をしつゝ、次の日力平を従へて、件の雛屋に赴きて、雛買ひに来つる由を、訪はせたりければ、妙作やがて出迎へて、「雛の御用はいかなるを、召され候ぞ」と尋ぬるに、无方太は店棚にうち上り坐を占めて、さて所望の雛人形を、多く出させて見るものから、心雛にあらずして、重石がこゝへ出よかすと、思ひぬるとは得ぞ知らぬ、乙締は雛の出し入れして、はじめより店にあり、木偶蔵は般七の、供に連れられて宿所にあらねば、重石は已む事を得ず、煎茶を茶碗に汲み取りて、持て出でて无方太に勧め、上がり框に

尻掛けたる、力平にも勧めなどして、そがま、奥へ退きけり。

こゝに至りて无方太は、初めて重石を見ることを得て、魂浮かれ心迷ひて、時の移るを知らざるまでに、立ましく惜しき綾錦、金襴の衣裳を着けたる、いと麗しき女人形の、価高きを買ひ取りて、それを力平に持たせつゝ、やうやくにして出でてゆきけり。

その時妙作・○右の中へ ○左の上より乙締らは、共に心に思ふやう、「今時ならぬに価高き、雛人形を買はるゝは、稀なる得意なりけり」と、喜ぶのみにて後つひに、親子の仇になりぬべき、その柵の端なるを、神ならぬ身の知らざりける。

○かくて手嵐无方太は、いかで重石を娶らんと、思ふ心を母親なる、老蚊にのみ囁き告げて、かき口説きたりければ、賢しきも愚かなるも、子にいと甘きは世の中の、□下へ □中より母親の習ひにて、さすがに止めがたくやありけん、傍らに人なき折、すなはち夫无適齋に、无方太の願事を、筒様々と告げしかば、无適齋は聞あへ



(4ウ・5オ 无方太、重石をうかがつ)



ず、「そは又思ひがけなき事なり。若きもの、迷ひにて、

ざる不正事を言ひ出づるとも、叱りとゝむるこそ親の役

なるに、そなたもそれをよしと思ふ。悴せかれをこ、へ呼ぶ

べし」とて、无方太を、呼び寄せてさて言ふやう、「わ

が家は先祖より、武士ならぬ者もなければ、次つぎへ（4ウ・

5オ）／富むといふとも町人の、娘を娶りし例なし。わ

り（力平）へ細工はよくても値が高くて、生きた

雛には及ばぬ〜。

む（无方太）へこちの娘は男勝りの、力があるとい

ふ評判記じやが、実にさうかの、どうじや〜。

妙（妙作）へそれは人違たがへでござりませう。わが子

ながらさやうな事は、一向に存じませぬ。まづ

〜雛こひなを御覧ごらんじませ。

乙（乙締）へお値段にお構ひなくは、これよりよい

ものござります。蔵にあるものを出示ませうか。

重（重石）へ前髪立ちの癖として、好かぬ事を言ふ

お客だの。早く帰つてしまへばよいのふ。



(5ウ・6オ 无方太、无適齋に叱責される)

が身は今浪人にて、年頃武家に仕へざれども、文学武芸を人に教えて、貧しくもあらず世を渡るは、先祖相伝の余徳なるを、年若くとも子孫として、色に迷ふて家の掟を、守らで先祖を辱むるは、不孝不義にあらざるや。われつらく、和主の行ひざまを見て思ふに、その身に

適(无適齋)へわれは円塚殿よりも千葉殿よりも、

出入扶持さへ給はるに、子に教訓の▼▲▼▲等閑

ならば、人の誹りも恥づかしい。以来はきつと

慎むか。サア返答せい、どうじやく。

む(无方太)へ段々謝り入りました。きつと慎みま

す慎みます。

か(老蚊)へわたしもてつきりお談義を、聞くだら

うと思つたが、あの子が余りに凝り固まつて、

恋病みにでもならうかと、思ひ過ぐしのせら

る、故に、取り次ぎしたは□□大誤り。无方太

お詫びはわしがする。早く立つて行きやいなう。

▼上部中央の聯に「將折福丈相」とある。

ちとの力あり、ちとの武芸を鼻にかけて、人を人とも思はぬ癖あり。能ある鷹は爪を隠すといふ、世の常言もあるなるに、己を知らずで人に誇るは、禍をとる一端也。慎まずはあるべからず。和主は今年十八なれども、額髪を剃り除かせず、いまだ男になさざるは、ちとの過ちありとても、人の許さん為なるに、そを思はぬは愚か也。今よりの後重石とやらの、事はきと思ひ絶えて、文武の稽古を励むべし。いと嗚呼也」と飽くまでに、叱り懲らすは父親の、慈悲とは知れど母老蚊は、今更立ち端を失ふて、黙然たるそが程に、无方太はたゞ「あい／＼」と、頭を搔きつ、桃尻して、猫に袋をかぶせしごとく、後じさりしてやうやくに、己が部屋にぞ退きける。

○されば手嵐无方太は、思ふにも似ず父親に、教訓の咎を当てられて、上には慎むごとくすれども、下心には一日も、重石が事を○左へ／＼○右より忘れがたさに、腹の内に思ふやう、「親父は昔氣質にて、重石を只これ町人の、娘と聞て嫌はるれども、彼が力は巴にも、板額

◆鎌倉時代の勇婦にもいや増して、百人力の勇あり

といふ、世の風聞を聞けなば、必ずやわが嫁に、せまく欲しう思はれん。なれども我すらかの少女の、力をいまだ試し見ざれば、その義を▲中へ／＼▲上より親には言ひがたかり。いかで重石が力の程を、目の当たりに見る術もがな」と、思案をしつ、忍び／＼に、父无適斎の武芸の弟子に、血氣いづれも盛んにて、色を好める若者らに、思ふ心を囁き告げて、謀を□右の中へ／＼□左の中より談合するに、芝崎村のほとりより、日ごとに稽古に来ぬるあり、无方太の密談を、聞つ、しばしうち案じて、「そは究竟なることこそあれ。我が住む芝崎川のほとりには、夏ごとに所の若人が、大きな石を弄びて、力試しをする事あり。今は五月の半ばなれば、石は積まれて道辺にあり。その若人らに◆右の下へ／＼◆印の中より酒肴を、贈りて石を借り受けて、筒様々に計りなば、重石とやらにいふ少女の、力のありなしを試し見る、近道にこそあらんずらめ」と、言ふに无方太喜びて、「その義まことにしかるべし。聞くに重石は月の廿八日に、必ず目黒へ参るといへば、芝崎村を過るならん。その折に

こそ謀はかりごとを、施すにたよりあらめ。しからはとせんかうせよ」とて、密かに示し合はする程に、その月の廿八日も、程遠からずなりにけり。

その時无方太また思ふやう、「重石の力を試すのみにて、わが力を見せずもあらば、何をもて彼に思はれん。されどもわが力は、纔に三人五人力のみ。懃なる事をせば、かへつて重石に笑はれん。せん術あり」と思案しつ、あたり近き石工にあつらへて、重さ八十メ【▼「貫」目ある、いき石の内をうつろに彫り抜かせて、例へば黄身を吸ひ出だしたる、玉子の殻のごとくにしたれば、十貫目に足らずなりぬ。その上には次へ(5ウ・6オ)／八十貫目と彫りつけさせて、その夜かの芝崎川なる、石のほとりへ遣はして、これをも積ませて置かせけり。

かくてその日になりしかば、无方太は、同気相求むる同門の若者、二三人ともる共に、力平を従へて、芝崎川のこなたなる、巷に憩ひをる程に、かねて示し合はされたる、そこらの若人幾人が、招かざれども集ひ来つ、无方太らともる共に、石を擡げて力を試すに、あるは二十

貫三十貫、五十貫目を限りにて、人に優れし者はなきに、无方太はかの偽物の、八十貫目の大石を、いとも容易く抱き上げて、肩に上しつ取り直して、目上高く差し上げたり。人その石のうつろにて、蹴鞠のごときを知らざれば、肝を潰しつ手を打ち鳴らして、ヤヤと誉めぬはなかりけり。

さる程に重石は、かゝる事ありとも知らず、この日も木偶蔵を従へて、朝疾く出でて目黒なる、不動尊に詣で果てて、日影や、傾く頃、芝崎村まで帰り来ぬる程に、町幅狭きところにて、人多く立ち混みて、いと大きな石を、弄びてありければ、道去りあへず思はずも、しはした、ずみたりけるに、无方太が持てる石の、偽物なるを猜しけん、笑みを隠しつ隙もあらば、行き抜けまくほりする程に、无方太らはこれを見て、かねて巧みしことなれば、いくつともなき件の石を、横様に押し並べて、「誰にもあれこの石を、跨ぎ越ゆる者あらば、決して許さず相手にせん。さるを向かふへ行きたくは、押し片付けて行きねかし」と諸声高く呼ばはけり。



（6ウ・7オ 无方太、重石の行く手を阻む）



重石はさら也木偶蔵は、事を好める若人の、嗚呼業かなと思へども、争ふべくもあらざれば、なほ行きやらで
ありけるに、重石はおめたる色もなく、「木偶蔵来よ」と
呼びかけて、進み寄りつ、かの偽物の、うつろ石に諸

偶（木偶蔵）へ悪い所へ来か、りました。嬢さまお
控えなさりませ。

重（重石）へこ、より他に道はなし。まアどうした
らよからうな。

む（无方太）へ見たか、今日の大関は、俺の外
に□／＼あるまいぞ。八十貫や九十貫は、何の
手もないお茶の子さ。

力（力平）へおらが旦那は石橋山の、佐奈田与市
【岡崎義忠】の上をゆく。五大力士も及ぶま
い。

皆々へそれ／＼そこへ来たおむすは、いく／＼し
【「石印」で重石のことか】ではないかいの。
ちよつと見なく。

手を掛けて、擡げ起こしつ力に任せて、かたへの石に投げ付くれば、石は二つに打ち割れて、玉子の殻の如くなるを、諸人見つ、呆れ迷ひて、「これはく」とばかりに、しばし響動みてありける程に、重石・木偶蔵は足早に、早くもそこを行き抜けて、妻恋の宿所へ帰りける。

されば亦无方太は、巧みし事のあだとなりて、重石の力を試すに足らず、かへつて己がこしらへたる、うつろ石をうち割られて、人の物笑ひになりもやせんと、思へば口惜しき事限りもなければ、

○右の下へ

○左の上よ

りそもかの少女の故なれば、恨むべきことにはあらず。さるを重石を手に入れずは、いよいよ人に笑はるべし。よき媒もがなど思ふ程に、近ごろ日毎に糸針を、売りに来ぬる女商人、お未曾とか呼びなしたるは、もとかの雛屋に仕へたる、炊き女なりきと聞知りて、「こは究竟の者なり」と、思へばちとの金を取らせて、恋の媒にぞしたりける。

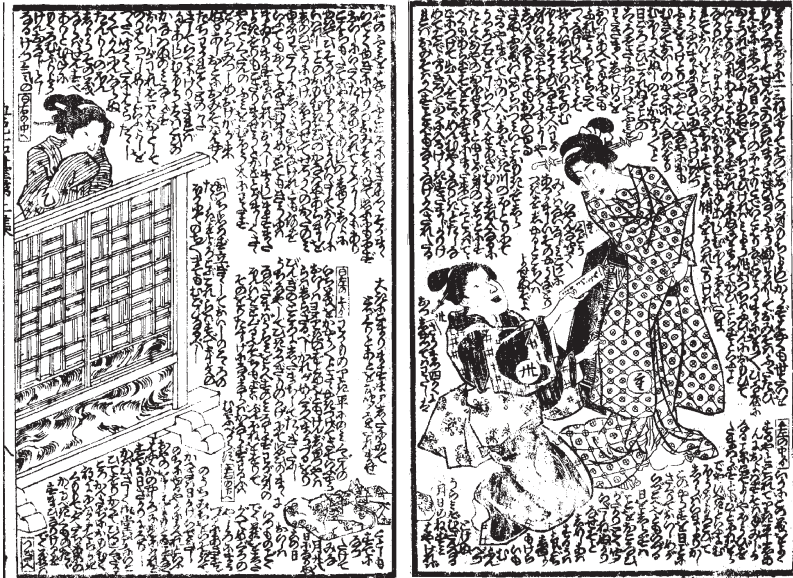
さればお未曾は往ぬる年、雛屋に勤めてありし時、身の暇を乞ひ受けて、上総なる故郷の、何がし村に帰り行

きて、人の妻になりけるに、

次へ

(6ウ・7オ) / をる

事わづか二三年にして、その夫の身持ちよろしからず、早くも世帯を持ち崩して、せん方のなきまゝに、是非なく夫婦別れてして、お未曾は再び江戸に来つ、その日暮らしの細元手、糸針などを売るまゝに、折々雛屋に訪れて、身の不幸せをうち侘げければ、妙作・乙締は不憫に思ひて、糸針の用あるごとに、必ず彼が来ぬるを待ちて、買ひ取らずといふ事なかりき。しかるにお未曾は思はずも、手嵐无方太に頼まれて、重石を恋の媒にとて、よき餌を飼はれたりければ、欲には迷ふ習ひにて、受け引きつ文を受け取りて、やがて雛屋に赴きて、重石のかたへに人なき折、无方太主のこと筒様々々と、日ごろ恋ひ焦がれぬる、事の心を囁き告げて、文を渡さまくしてけるを、重石はあへて手にだも触れず、うち腹立てつ、投げ返し、「お未曾そは何をか言ふ。その无方太とか呼びなす人は、わが身いまだ見も知らず。よしや知る人なりとて、親の許さぬ不義いたづらは、罪いと重きを知らざるや。まいてかの人は、芝崎川のほとりにて、うつろ石



(7ウ・8オ お未曾、重石に文を渡さんとする)

をこしらへて、人を欺く痴人なるに、たとへ親の仰せなりとも、わが身の夫にすべくもあらず。それを懲りずまにまた来て口説かば、父御に告げて出入を止めん。無益なりき」と窘めて、袖振り切つて奥に入る、気色凄まじかりければ、お未曾は返す言葉もなく、投げ返されたるその文を、早く懐に収めつゝ、そがま、出でてゆきにけり。

○お未曾はかねて思ふにも似ず、重石にいたく窘められて、恥づかしくもあり小腹も立てば、やがて手風の宿所

重(重石)へくどう言やんな聞く耳はない。馴染み

ごかしに厚かましい、そのやうな取り次ぎを、しやるところへは寄せぬぞよ。

卅(お未曾)へさうまつ四角に仰つては、わたしは大きに困ります。まア下にゐてとつくりと、

後をお聞なされませ。

へ乙締思はず立聞きして、重石の心の正しきを喜ぶ。

これらは全て本文のほかにて、後々までも無言なるべし。

にゆきて、秘かに无方太を呼び出だして、重石に言はれし事の趣、恋の叶はぬあらましを、忍びやかに告げ知らせ、「折角のお頼みゆゑ、私に如才はなければども、何を言ふても奥手な生娘、とても急には参りますまい。これはお返し申します。また良き折もござりませう」と、唧言がましく囁きて、件の文を、无方太に渡す折から、炊女桶鷺が来ぬる足音に、お未曾は早く立ち別れて、外方さして出でにけり。

されば手嵐无方太は、恋の叶はぬのみならず、重石が我を見落として、罵り辱めしといふ由を、伝へ聞くだに腹立しくて、堪忍ならぬ短慮の本性。「その義ならばせん術あり」と、胸に目論む不料簡、同じ歳なる血気の右の中へ、左の上より若者力平にのみ、件の一義を箇様々々と、囁き告げてさて言ふやう、「重石は多力の少女也とも、剣術、柔は知らざるべし。彼が目黒に詣づる折、便宜の所に下待ちして、叩き倒し打ち萎して、引き担ぎ物陰にて、思ひのまゝに慰まば、怨みを返すのみならず、わが身の本意を遂ぐる也。そちも随分骨を折り

て、その折助けになるならば、必ず悪ふは報ふべからず。

▲右の下へ／▲左の中よりいかにこの義をよくするや」と、問はれて力平思案に及ばず、「それは手短なる事にごそ。よしや褒美を賜はらずとも、一骨折らでや候べき」と、言ふに无方太喜びて、「しからば今より彼処の様子を、日ごとに探りて重石めが、何処へ也とも出づる日を、知らずは事を行ひがたかり。とく聞出だしね、抜かりなせそ」と、示し合はする浮気同士、主も家来も無分別、解けぬ怨みぞ無慙なる。

月日の鼠早ければ、今年もすでに夏開けて、水無月廿八日になりぬ。この日重石はいつものごとく、木偶蔵を従へて、目黒の社に詣づるに、「朝涼のうち道を急ぎて、帰さは日陰いできし後に、緩やかに帰れ」といふ、親の教えに悖ることなく、早く彼の社に來にけれど、既に日盛りになりしかば、久しく御堂に憩ひてをり。かくて未だ下るころ、帰路に赴く程に、にはかに空かき曇りて、夕立雨のかゝるべき、雲のたゞすまひなりけるを、木偶蔵は次へ(7ウ・8オ)／続き仰ぎ見て、「こゝらで雨に



（8ウ・9オ 重石、无方太らと争つ）

遭ふならば、傘宿りする。▲左へ

▲右より家もなく、傘

を買ふべき店棚もあらず。我らはちよと走り帰て、い

つもの馴染みの茶店にて、傘一本借りもて来てん。徐

かにゆかせ給ひね」と、言ふに重石はその義に任せて、

木偶蔵を帰し遣はし、しばらくそこに佇みたれども、さ

てあるべきにあらざれば、降らぬ先にと道を急ぎて、洪

谷の里まで来にけるに、この時こゝらは片田舎にて、道

の左右に松柏の、いやが上に生ひ繁りて、昼も小暗き所

あり。もとより人の家もなければ、重石はちつとも油断

へ木偶蔵帰りかゝりて胆を潰すところ。○／○これ

らは本文に具なり。

む（无方太）へ可愛さ余つて憎さも百倍。今まで延

ばした鼻の下、二本棒もてどやしてくれう。

重（重石）へ女を相手に何するのじや。悪く騒ぐと

痛い目するぞへ。

力（力平）へ旦那を見真似に力んだ力平。なめら三

宝あいたしこ。

せず、足を早めて過りゆく。後ろに窺ふ无方太・力平、左右等しく閃かす、藪から棒の諺に、漏れぬ相手を認めねども、重石は早く身を躲して、空を打たしつ亦閃かす、二人の棒を日傘もて、受けとどめたる手練の早技、隙もあらせず力平を、かい掴みつ、力に任せて、礫のごとく投げ飛ばせば、力平はそこらの株に、頭を撃ち砕かれて、叫びもあへず死んでげり。

これにぞ驚く无方太は、なほ懲りずまに隙間なく、打ち閃かす。□右の下へ／＼□左の上より桿棒を、重石は丁と取りとめて、怯むを得たりと棒もる共に、引担ぎてぞ投げたりける。類稀なる少女の大力、无方太もまたそこらなる、葛籠石に身を砕かれて、血にまみれつ、倒れけり。重石は思ひがけもなき、二人の仇を投げ退けて、その死したるを知らざれば、敢へてまた懸念せず、家路をさして急ぎけり。

か、りし程に木偶蔵は、目黒の茶店に走り帰りに、**〔次〕**
 へ (8ウ・9オ) / 傘を借らまくするに、出茶屋なれば傘なしと、言はるゝに術もなく、重石を追ふて帰り来る、

渋谷の森のほとりにて、と見れば二人の若人が、重石を挑む程しあらず、是彼共に投げ伏せられて、重石はちとの怪我もせず、既にゆき過ぎたりければ、木偶蔵は木陰より、見つ、驚きかつ呆れて、投げ倒された二人の仇の、ほとりに立ち寄りてよく見るに、一人は頭を打ち砕かれ、一人は胸骨をや挫かれけん、共に息絶えてありしかば、木偶蔵いたく驚き憂ひて、思案をしつ、腰にさしたる、矢立の筆を抜き出だして、その傍らなる葛籠石に、「己むことを得ずこの仇二人を、投げ殺したる者は、妻恋坂なる木偶蔵」と、二行に記し付けて、なほ亦重石を追ふ程に、雲収まりて雨降らず、わづかに五六町にして、早く重石に追ひ着きたれども、重石は今日の危難を告げず、木偶蔵も亦主に代らんと、欲しし由を言ひも出でず、たゞもる共に道を急ぎて、七つ下がりて妻恋なる、宿所へぞ帰りける。

○その次の日の昼過ぐる頃、目黒の村長・五人組らは、所の百姓を従へて、雛屋の店に訪ね来つ、「こ、許に木偶蔵と、いふ人あらは会ひたく候」と、言ふを木偶蔵聞



(9ウ・10オ 木偶蔵、捕らわれる)



つけて、「木偶蔵は我ら也。何の御用」と立ち出づるを、皆々透かさず取り籠めて、縄もて厳しく縛りける。これにぞ驚く妙作・乙締、もろ共に走り出でて、まづその故

乙(乙締)へよんべ夢見の悪かりしは、かういふ事のあるべしと、神ならぬ身の知らざりき。悲し
い事になりました。

妙(妙作)へいづれにしても一人は科人。ハテ是非
もない事じやなア。

重(重石)へいや／＼そなたに科はない。喧嘩の相
手はわしじやぞよ。

村(村長)へさう争ふては果てしがな。御領主さ
まへ出た上で、いづれなりとも分からうぞへ。

五(五人組)へさやう／＼。

偶(木偶蔵)へ我々親子が旦那さまへ、御恩返しは
今この時。○／○嬢さま何も宣ふな、覚悟極め
てをりまする。

へこの武士の事、次に見えたり。

を尋ねれば、村長答へて「さればとよ。昨日洪谷の森辺にて、喧嘩やしけん相手の武士を、二人まで投げ殺しし者あり。そは妻恋坂なる木偶蔵也と、自訴して石に書き付けたれば、搦め捕りて御領主様へ、訴へ申さんためにこそ、訪ねてこゝに来つるなれ」と、言ふを妙作訝りて、「そは心得がたき事なり。木偶蔵は我が家の、小者にて人などを、投げ殺すべき力はなし。武芸・柔はちとはかりも、学びしことはこれなきに、名は相似てもその人に、あらざるべくや候はん」と、言ふを木偶蔵おし止めて、「旦那様さな宜ひそ。昨日洪谷のほとりにて、人に喧嘩を仕掛けられて、已むことを得ずその相手を、投げ殺ししは僕也。今は逃るゝ道もなし、御名残こそ惜しけれ」と、言ふを重石は次の間にて、立聞しつゝ、堪えかねて、忙はしくたち出でて、村長らに 右の下へ / 左の上より 向かひて言ふやう、「昨日目黒の帰るさに、我が身を狙ふ者ありて、声をもかけず後より、棒もて打たんとしたりける、その仇は二人なれども、幸ひにして戦ひ負けず、彼らを左右へ投げ退けしに、石に急所をや打

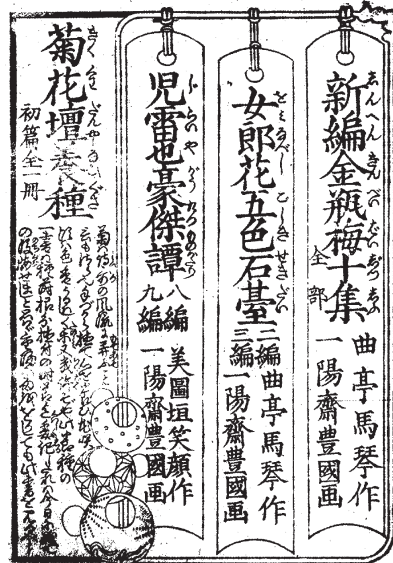
たれけん、共に命を落とすは、かの身の不幸のみならず、我が身の不幸を如何はせん。折から供人木偶蔵は、筒様々々の訳ありて、我が身に遅れて来にければ、喧嘩の側杖打たれねども、事の様子を窺ひ知りて、わが身の罪に代はらんと、思ふ忠義の真心をもて、名を記しに疑ひなし。皆さまこの義を聞分けて、やよ木偶蔵を解き許し、我が身を縛りて何処までも、 次へ (9ウ・10オ) / 引きもてゆかせ給へかし」と、言ふを木偶蔵おし止めて、「そは嬢さま情けなし。喧嘩の相手は僕なるに、御身の知る事ならんや」と、言ふを重石は聞あへず、「そは虚言也、いかにして、そなたに無実の罪を負はせん。妾を引きもてゆき給はずや」と、互に命を惜しまざる、争ひ果てしなかりしかば、妙作・乙締いへばさら也、村長らも皆疑ひ迷ふて、「二人はか細き小者也、一人は二八の少女也。いづれにしても二人まで、相手の武士をひと投げに、投げ殺すべくもあらず。これには必ず訳あらん、それかあらぬか」とばかりに、定めかねつゝ、黙然と、うちまもりてぞゐたりける。

かゝる折から一人の武士、身のざま卑しからざるが、
 深編笠を戴きて、先よりこの店先にあり、ことの様子を
 聞果てて、「許し給へ」と言ひつゝも、編笠脱ぎ捨て進
 み入る。この武士はこれ別人ならず、无方太の親なりけ
 る、无適齋宗正也。妙作にうち向かひ、名乗りをしつゝ、
 言ふよしあり。こと長ければこゝには尽くさず、この次
 の巻に記すべし。



(10ウ) 无適齋、雛屋を訪れる

《第一冊 後表紙封面》 ※東北大学図書館野文庫蔵本による



適(无適齋)へわが妻にも言ひ付けたれば、彼も我
 らに異ならず、倅がことは思ひ絶えて、喜んで
 ゐますから、第一の安心でござる。

重(重石)へ捨つる命を助くる神。不思議な御縁で
 ござります。

妙(妙作)へことを分けたるお扱ひにて、まことに
 恐れ入ります。

《第二冊前表紙》

※東大図書館蔵本による



弘化五戊申春

上帳下

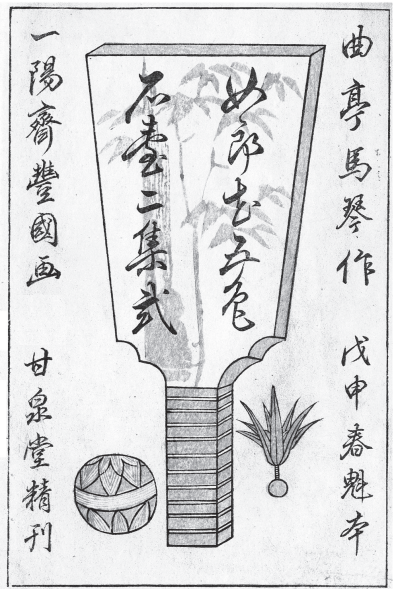
一陽齋豊国画

女郎花五色石台二集

▼第一冊の前表紙と一連。描かれる人物は自胤。

《第一冊前表紙見返し》

※東大図書館蔵本による



曲亭馬琴作

戊申春魁本

女郎花五色

石台二集式

一陽齋豊国画

甘泉堂精刊

▼薄墨を使用。

(一)

〔右の続き〕その時无適齋は、妙作にうち向かひて、「驚き思ふ息女の勇力、世にありがたき木偶蔵とやらの忠、心共に感ずるに余りあり。これにつけても我が子なる、无方太の無分別、さしも女を相手にして、可惜命を失ひしは、取るに足らざる痴者なれども、殺しし人は罪免れず、下手人たること勿論也。よしや木偶蔵が忠義にて、その死に代はらまく欲するとも、公沙汰に及びなば、遂に虚実を糺されて、息女は免れがたかるべし。さればとて我も亦、その折見たるにあらねども、息女重石の大力は、世の風聞に隠れなく、又我が子无方太が、重石を娶らまく欲ししに、我あへて許さねば、彼情欲のやみがたきに、艶書などを送りしより、恨みを結ぶ由ありて、討ち果たさまく欲ししならん。今打つ槌は外るゝとも、この推量は違ふべからず。和殿この義を知りたるや」と、言はれて妙作当惑の、眉を擡めてありける程に、重石は無適齋にうち向かひて「御推量に違ふことなし。妾は無方太主とやらんを、まだ見も知らでありけるに、往ぬる日かの

人媒をもて、文を送らせ給ひしを、いともつれなく言ひ奢めて、その文を返ししかば、憎しとや思はれけん。これより他に恨みを受くべき、覚えとては侍らずかし」と、言ふに无適齋領きて、「しからは木偶蔵に罪はなし。やよその縄を解くべし」と、言ふに村長らは心得て、やがて木偶蔵を解き許して、右の下へ 左の上より 重石を縛らまくしてけるを、无適齋押し止めて、「その義もわれ亦分別あり。我が言ふ由を聞れよ」と論しつ亦、妙作にうち向かひて、「只今聞れし訳なれば、とてもかくても重石は下手人、助かりがたき命也。さればとて此少女を、殺したりとも既に死したる、わが子の黄泉帰るにあらず。この故に重石を助けて、わが娘になさまく欲す。次へ（11オ）／和殿この義をよしと思はゞ、渋谷の事は内済して、領主へ申し出づることなく、和睦して親類の、思ひをこそなすべけれ。こと偽らざるしるしには、神も仏も照覧あれ、生涯粗略すべからず」と、誓ふ言葉の露清き、心を汲みて妙作は、「末はともあれ一旦の、命助かることならば、辞むべくもあらず」とて、和睦の

一義に及びしかば、乙締はさら木偶蔵も、それはせめてもの事也と、思ひながらも本意なきに、さし俯きてぞゐたりける。

その时无適斎は、件の村長・五人組らに、和睦の由を言ひ知らせて、後々までも障りなしといふ、証文を取らせしかば、村長らはことの丸くなるを、相喜びて異義もなく、皆々宿所へ帰りけり。

その时无適斎は、妙作・乙締にうち向かひて、「善は急げと世話にもいへば、只今重石を引き取りて、我が家に伴ふべし。もちろん互ひに、安心の為なれば、親知らずの養女証文を、取り交はすべけれ」とて、かたみに証文一通を、取り交はしなどする程に、乙締は銚子盃の、用意をしつゝ、无適斎に勧めて、親子別れの盃、涙とともに酌み交はす。

この日も重石の兄般七は、能楽もの、癖なれば、何地ゆきけん宿所にあらねば、妙作・乙締は事足らぬ、心地すれども明日までも、待たるべくもあらざれば、重石が着替えの衣などを、木偶蔵に背負はせて、提灯持たせて

円塚まで、送るべしとて遣はしけり。

かくて无適斎は、辻駕籠を雇はせて、重石を乗せて妙作らに、別れを告げて帰りゆく。近きわたりも親知らずといふ、関の鎖しに妙作・乙締、重石も共に胸塞がりて、涙を包む薄衣の、袖に玉漏る心地せる。木偶蔵はいと本意なしと、思ふ心を言へばえに、岩堰く夏の苔清水、止めかねつ、従ふて、円塚さしてぞ急がれける。

○さる程に、无適斎の妻老蚊は、昨日一人子无方太が、僕力平ともの共に、渋谷にて横死の事、その折早く聞えしかば、胸を潰しつうち嘆きて、わく由もなくありけるを、无適斎諭し慰めて、その夜の内に无方太と、力平の亡き骸を、忍びやかに引き取りて、宿所へは昇きも入れず、やがて菩提所へ遣はして、内葬をしぬる程に、无適斎は思ふ由を、密かに老蚊に説き示して、「この義其方もよしと思はゞ、牛に馬を乗り換へる、わが家の幸ひ也。従はるゝ、かいかにぞや」と、言ふに老蚊は争ひかねて、「とにもかくにも御身のまにく、計らせ給へ」と答へしかば、无適斎喜びて、雛屋へと出てでてゆきしより、

久しくなるまで帰り来ず、この日も既に暮過ぎて、无適齋は雛屋妙作に、件の重石を貰ひ受けて、辻駕籠に乗せて帰り来にければ、老蚊はやがて出で迎へて、重石を労りなどしたる、もてなし大方ならざれば、重石は命の親也と、思へばさしも頼もしくて、その喜びを述べなす。その时无適齋は、木偶蔵を労ふて、駕籠昇らともる共に、妻恋坂へ帰し遣はし、老蚊に今日雛屋にて、ありつる首尾を説き

○右の下へ

○左の上より

示せば、老蚊



(11才 老蚊、重石に盃を勧める)

は亦炊婢なる、桶鷺にかねて言ひ付けたる、夕膳を夫にも、□/□重石にも勧むる程に、夏の夜早く更けにけり。○その次の日に无適齋は、軍学の講釈に、石浜の城「浅草・千住辺に存したとされる」に赴きて、朝より宿所にあらざれば、老蚊は手づから銚子盃を、重石のほとりへもて出でて、「不慮のことにて親となり、子となることは宿世より、逃れぬ業報なるべけれ。とばかりにしてまだ親子の、盃もせでありけるに、今日は殊更吉日なれば、その欲びを尽くすべし」と、言ひつゝ、盃取り上げて、飲むやうにして重石にさせば、重石は受け戴きて、「妾は下戸に侍り」とて、飲まじとすれど酌を取る、桶鷺が強ひてなみくと、注ぐをさすがに捨てかねて、

重(重石)へ養ひ親は命の親。重ねくし御高恩。足らぬところはお指図を、○/○受けてお仕へ申ませう。

蚊(老蚊)へ今日改めて親子の盃。これから随分孝行を、尽してもらはにやならぬぞよ。

(11ウ・12オ 老蚊、重石を縛める)



次へ (11ウ・12オ) / やうやくにして尽す程に、怪しむべし重石はそがま、眠るがごとくに倒れけり。

その時老蚊は笑ましげに、重石を見つゝ、さて言ふやう、「わが夫の仇心なる、恨みは返さでこの仇を、養はんと言はるゝを、辞までこゝへ引き取らせしは、手づから殺してわが子の恨みを、清めんと思へば也。なれども此奴は大力にて、男勝りの聞えあれば、騙すにしかじと思案して、毒酒をもつて倒したれば、死にも得やらす生きもせず、鰻を裂くよりいと易かり。桶鷲も共に手伝ふて、柱へ縛りつけずや」と、言ふに桶鷲も主に劣らぬ、心邪

桶 (桶鷲) へ 生命なれば否とも言はれず。コリヤ 魚を料るより、しにくい仕事でござります。

蚊 (老蚊) へ 毒酒に酔ふて苦しくは、今その胸に風穴を、開けて醒ましてやらうぞや。仏心のこちの人、今日の留守を幸ひに、なぶり殺しにして腹をいる。桶鷲も一針手伝ふて、雑巾ほどに刺したがよいぞや。



（12ウ・13オ 不動明王、重石を救つ）

慳けんの癖くせなれば、一義いちぎに及およばず手伝てでんふて、倒たふれし重石おとしを引ひき起おこしつ、縁側えんがはなる真柱まはしらへ、ぐる／＼卷まきにぞしたりける。

その時とき老蚊おいかは二振ふた振りの、短刀たんたうを出だし来きて、その一振ひと振りを桶鷺おけがに授まかせ、主従しゆうじゆひとしく抜き持ちのちて、なほ罵ののし罵ののる恨みうらみの数々かずかず、共に刃やいばを閃ひらめかして、重石おとしの胸むねを刺さんとす。程ほどしもあらず赫突かくやくたる、光ひかりと共に不動明王ふどうめいおう、忽然こつぜんと現れ給たまひて、劍つるぎをもつて老蚊おいからを、薙倒なぎたふし給たまひつ、返やいばす刃やいばに重石おとしを縛しばりし、細引ほそびきの麻繩あさなはを、切り断きりち給たまふと見る程ほどに、老蚊おいか・桶鷺おけがは「あ」と叫こびて、身みを空様そらさまにとんぼ返かへりて、血反吐ちへどをつきつ、撞たうと倒たふれ、重石おとしは眠ねりの醒さめたることく、毒酒どくしゆの酔よひのあらずなりけん、矜羯羅こんがら・制多迦せいたか両りやう童子どうし【▼不動明王の脇侍】の、救すくひ取とらせ給たまふにや、行ゆく方も知らずなりにけり。

へ此所こゝ、お未曾みそが次つぎの間まより、垣間かいま見てをるなれど、そこまでは描あがれず。只ヒウドロ／＼にて、すべて無言むごんの場ばと見るべし。

○か、りし程に針売お未曾は、この日も糸針を売らんとて、手風の宿所に来にけるに、奥には主の女房の、罵る声してければ、「何事やらん」と訝りて、次の間まで進み入り、間なる障子の破れより、覗き見てありしかば、老蚊が重石を酷く縛りて、炊婢桶鷺ともる共に、短刀を抜き持ちて、殺さんとする始めより、不動尊の神罰にて、老蚊・桶鷺は即坐に倒れ、重石は柱に縛られたる、細引の縄ふつとちぎれて、形は見えずなりけるを、お未曾は目の当たりに見てければ、いたく恐れつ戦慄かれて、立ちも得やらでありける程に、无適斎は石浜より、折よく帰り来にければ、お未曾はやがて出迎へて、怪しきことの趣を、簡様々と告げしかば、无適斎は驚きながら、そが俣奥に入りて見るに、桶鷺は既に息絶え果てて、さらに亦生べくもあらず。老蚊はなほ胸のあたり、いさ、か温かなりければ、氣付け薬を注ぎ入れて、お未曾と共に呼び活ける程に、老蚊はやうやく我に返りて、死なざる事を得たれども、お未曾が既に垣間見て、ありつる事のあり様を、无適斎に告げしと言へば、老蚊は隠すに

隠し得ず、重石を深く恨むるの余り、毒酒に酔はして殺さんと、謀りしことの顛末を、やうやく白状したりける。か、る所に般七は、▲石の下へ／▲上の左より父妙作に言ひ付けられて、重石に暇乞ひせん為に、木偶藏に酒肴を、持たせてこの時来にければ、无適斎は「折悪し」と、思ひながらも呼び入れて、坐敷にて対面す。さて隠すべきにあらざれば、妻の老蚊が悪心にて、今日无適斎の留守の程、重石を殺さまくしけること、重石は神の冥助にやよりけん、縛られたる縄自づからに千切れて、彼の身は何地ゆきけん、行方も知らずなりしといふ、その事のあらましを、告げ知らせ亦言ふやう、「某はこの年頃、偽りをもて仮初にも、人を欺きしことあらず。義によりて恩愛に、思ひ代へたればこそ、重石を養女になしたるに似ず、妻の老蚊はかたくなにて、夫を欺くのみならず、重石を殺さまくしたりける、悪の報ひは觀面にて、下女は神に蹴殺され、老蚊は半死半生なる、為て体和殿らに、見するは我さへ恥づかしく、面目もなく候へば、妻の老蚊は次へ（12ウ・13オ）／離別して、彼が親



（13ウ・14オ 无適齋ら、騒動に驚く）

里へ帰すべし。この由親御へ申し給へ」と、言ふに般七・木偶蔵は、もろ共に驚き愁ひて、また慰むる由もなく、暇乞ひして妻恋なる、宿所へとてぞ帰りける。

さる程に无適齋は、炊婢桶鷺の亡き骸を、彼が請人に渡し遣はし、妻の老蚊に去状を、取らせて親里に返ししかば、かの身一つになりしかど、門人らの助けにて、下男下女にこと欠ず、不自由とはなけれども、重石の行方知れずなりて、尋ぬれども便なければ、妙作らに思はれん、人の誹りもさぞあらんと、思へばさすがに後ろめたくて、住み果つべくもあらざれば、この年の秋の頃、

卅（お未曾）へやうやく気付けは納まりました。早

く水を持つて来ておくれ。

般（般七）へひよんな所へ来合はせて、我らも当惑、

困つたものじや。

偶（木偶蔵）へこれはまことに大変々々。

適（无適齋）へ面目もない客人たち、見苦しけれど

まづ／＼こなたへ。

故郷へ帰るとて、千葉・円塚の両家をはじめ、門人らに別れを告げて、難波の方へ立ち去りけるが、そこにも留まらざりけるにや、年経ぬるまで一度も、訪れ聞こえずなりにけり。

さる程に般七・木偶蔵は、かの日妻恋の宿所に帰り来て、父妙作と乙締らに、手嵐の家内にて、今日大變のこの趣、女房老蚊の悪心にて、无適齋の留守の程、炊婢桶鷺と示し合はして、重石をいたく毒酒に酔はせて、殺さまくしける折、重石は神仏の助けにやよりけん、かの身は空蟬の裳抜けのごとく、何地ゆきけん見えすなりしといふ、その事のあらましと、无適齋の言ひつる由を、見聞しまゝに告げしかば、妙作はいふもさら也、乙締も共に驚き愁ひて、嘆きぞ果てしなかりける。

その時妙作が言ふやう、「重石は年十二の時、神隠しに遭ひけるが、久しからずして帰されたれば、彼命だに恙なくば、この度も亦遠からず、帰さるゝことなからずや」と、思ふものから胸安からねば、日毎に人を雇ひなどして、重石の行方を尋ねれども、つひに知る由あら

ずして、憂かりける日を送るのみ、ちとも便りを得ざりけり。

○過ぐる月日に関守なければ、又二三年を経ぬるまゝに、重石の兄般七は、心親にも妹にも似ず、世に多からぬ優男にて、色好みの癖なれば、三味線・小唄を

○右の中へ

／＼左の上より旨として、世渡りには身を入れず、宿にをる日の稀なれば、妙作いたく腹立てて、厳しく教訓しぬれども、いかにして言ふ甲斐あるべき、彼がために蓄へを、

□下へ

□中より失はるゝ事多かれども、只一人子のことなれば、さすがに追ひも出だされず。乙締も折々般七を、諫め諭しつ悪かることは、妙作に知らせずして、術よく取りなしたりければ、それを般七はよきことにして、日毎に遊び暮らしけり。

さればこの頃、浅草の片ほとりに、浮木の亀六と呼びなしたる、いと貧しげなる商人あり。この亀六の一人娘に、枯野の尾花といふ手弱女は、年の齡十六七にて、顔容醜からず。母は近頃身まかれども、彼糸竹の技をよくして、淨瑠璃・小唄も声妙なれば、これをもて父亀六の、



（14ウ・15オ 般七、尾花の弟子となる）

世渡りを助くる程に、遠近をうちの女めの子こども、多く尾花をの弟はな子こになりて、日毎ごとに稽古ひに來きにければ、弾ひく三味線さみせんの調てう子こと共に、その名も高くぞ聞えける。

されば亦はん般七はんは、もとより好める技なれば、いつしか尾花をの弟子はなになりて、三味線さみせんを次つぎへ（13ウ・14オ）／習なふ程ほどに、雅男みやびをとこと手弱女たをよめは、梅うめと桜さくらのいつつひ一対いっついにて、春はるの心こころの花衣はなころも、よそに漏はらさぬ香かをとめて、忍しのび／＼に契ちぎりつ、

般（般七）へ床開ゆかひらき【高座こうざの使つかい初はじめ】は何なにもか

も、俺おれが飲のみ込こんでゐるから氣遣きぢひはない。ち
らしも先刻あつら誂あつらへた。明日あすは影ほりが出來あるであらう。
女めの子こへわたしは早く新淨瑠璃しんじゆるりを、あげて後あとを習ま
ひたい。

同どうへアイわたしも左様さやう々々。

花はな（尾花）へ笠屋かさや三勝さんしょう忍しのびての、夜よはまだた四よか半はん七しち
が。ヲヤ般七はんしちさん、おいでだの。

▼尾花をの後方ごうに「さん・せん・いち・かめ・つる」
などの名札ななが並ならんで描えかれる。

浅からぬ中になりけり。

さる程に亀六は、娘の故に思はずも、よろづに般七が賭ひぬれば、細き煙もや、太りて、朝夕安しと思ひけり。しかれども亀六は、心僻める者にあらず、かの身若かりし時までは、しかるべき商人なりしに、遊芸を好みしより、廓の遊びに通ひそめて、多く銭を費ししかば、その家つひに衰へて、人に家蔵を売り渡し、親類には義絶せられて、せん方のなきまゝに、九尺二間の裏屋に移りて、不忍の池の端に出て、放し亀を売りなどして、細き煙さへ立てかねしに、近き頃凶らずも、善根功德の報ひにや、娘尾花の故をもて、ちとの元手に取り付きたれば、今は糶呉服などして、人並みに世を渡りけり。

さてその故を尋ぬるに、先づ年亀六は、生業のために、墨田川のほとりを過る程に、こゝらなる船人が、大きな亀を捕らへて、川端に引きもて来つ、打ち殺して油を取るべく、甲をはがして売らんとて、繩を掛け枓を入れて、昇きもてゆかんとせし程に、亀六急におし止めて、「我らは只この年頃、放ち亀を▼▲▲売れるのみ、さる

大きな海亀を見ず。亀は突ある物とし聞くに、無益の殺生したらんより、いかで我らに売り給へ。商ひ先のことなれば、銭多くはなけれども、一三百はこゝにあり」と、言ひつ、懐なる、銭財布を取り出だすを、船人らはあざ笑ひて、「そはよきことを言はるゝよ。この亀の油を取れば、五六舁の魚灯を得つべく、

○右の下へ

○印

の左より 甲さへ銭になるものを、わづかに二百や三百の売りだめ銭にて誰かは売らん。嗚呼なることを」と窘めて、受け引くべくもあらざりける、折から雛屋妙作は、この日石浜へ所用ありて、彼処へゆきたる帰るさに、思はずもその亀を見つ、放ち亀売りと船人の、価を論ずるをうち聞て、さすがにうちも置きがたさに、放ち亀売りに向かひて言ふやう、「あはれめでたき和どの、善心におよそ生けるを放つ者は、功德千僧万僧の、供養にもまさるといへば、我今亀の価を貸すべし。買ひ取りて放ち給へ」と、言ふに亀六喜びて、「そは忝き幸せ也。御身も亦その心あらば、我らが買ひ取るまでもあらず、御身が買ひ取り給はずや」と、言ふを妙作聞あへず、「い



(15ウ・16オ 妙作 亀六のために龜を買つ)

作者曰へ亀を救ふてその恩を返されしことは、大和

唐土もちしの、もの、本に見えたるを、予が『三国一

夜物語』一▼読本。文化三年刊、『新編金瓶

梅』一▼合巻。天保二年〜弘化四年刊』にも出

だしたれば、古めかしいと言ふ人もあらん。な

れども、是らは勧善の一つなれば、いく度たびにて

も厭いとはしからず。正に作者の真面目と見るべし。

九(九儀七)へ亀一▼「神」の洒落』は上がらせ給

ひけりじや。八文や十二文の、放し亀とは違ちがふ

ぞよ。

鑑(鑑平)へこのやうな大きな海亀は、正覚坊一▼

青海亀の異称』と呼びなして、滅多に手に入る

物じやアない。そを其方衆そなたしゆの▲／▲齒が立つも

のか。いけ馬鹿々々しい、サア行ゆかふ〜。

亀(亀六)へハテさう言はずに売つてくたせへ。ま

づ値ねを聞かう、いくらじや〜。

妙(妙作)へ奇特きどくな人もあるものじや。不躰ぶじつけながら

持ち合はせが、足らずはわしが貸しませう。

な。さしては人の功德を、奪ふに似て功德にならず。亀の買ひ主は和殿也。我らは佃を貸すべきのみ」と、言ふに亀六喜び感じて、さて船人らに佃を問ふに、金貳分ならば売らんと言ふ。次へ(14ウ・15オ)／これにより妙作は、懐なる紙入れより、小粒金を二つ出だして、名さへ所もまだ知らぬ、亀六に貸したりければ、亀六は受け戴きて、船人らに渡しつ、件を亀を買ひ取りて、もと河原に引きもてゆきつ、妙作も手伝ふて、掛けたる繩を解き捨てて、墨田川にぞ放ちける。その時亀は嬉しげに、亀六と妙作を、二度三度見返りて、入江の波に沈みつ、たちまち見えすなりにけり。

されば件の船人二人は、いかなる者ぞと尋ぬるに、その一人は鎌倉なる、悪者額荷九儀七なり。九儀七はそのはじめ、叔父の後鍛冶宗次が、ちとの過ちありけるを、湯上閉次に訴へて、後鍛冶ならびに乙締の叔父なる、打出の杭平さへに、無実の罪に落とし入れて、栄利を計りし曲者なれども、閉次はこれを功として、武士に取り立てんと言ひしかど、九儀七はこれを願はず、「欲する

ものは金にこそ」と、言ふに閉次は止めかねて、すなはち件の褒美として、金百両を取らせけり。これにより九儀七は、にはかに富たる心地して、やがて上総に赴きて、所の悪者と交はる程に、賭と酒とに耽りしかば、さしも件の百両は、夢のごとくに消え失せて、せん術のなきまに、海舟の飛び乗りなどして、墨田川のほとりにあり。又一人の船人は、針売りお未曾の夫と聞えし、上総なる鑑市也。此奴も亦能楽者なれば、お未曾を娶りていく程もなく、家を失ひ夫婦別れして、墨田河原にさそらひ来つ、渡し舟の雇ひ水手して、わづかにその日を送りけり。

されども妙作と亀六は、九儀七・鑑市を見も知らず、又九儀七・鑑市は、妙作を叔父嫁乙締の、兄品なりとは夢にも知らず、お未曾がもとの主也とも、知る由絶えてなかりしかば、よき扱ひにて金貳分の、得つきたりと思ふのみ。妙作は名乗りも得せで、そがま、亀六に別れつ、家路をさして急ぎけり。こはこれ已前の話なり。